

令和6年度全日本私立幼稚園連合会 中国地区私立幼稚園教育研修会 岡山大会
輝け未来！耕せ今！—これからの時代に求められる非認知能力

記念講演 子どもたちの笑顔を願って 作家 あさのあつこ先生

記念講演は約90分間、子どもたちの笑顔を願ってと題して作家あさのあつこ先生にまず講演いただき、後半はあさの先生を囲みいろいろな立場の幼児教育・保育に携わる5名との質問形式、対談形式で記念講演は実施された。



まずコーディネーターの光岡理事長よりあさの先生を紹介

あさの先生プロフィール

1954年岡山県美作市生まれ。青山学院大学卒業。岡山市にて小学校の臨時教諭を務めたのち、作家デビュー。「バッテリー」で第35回野間児童文芸賞受賞。「バッテリー」全6巻で第54回小学館児童出版文化賞受賞。「たまうら」で島清恋愛文学賞受賞。著書に「No.6」「弥勒」「烈風ただなか」「白兔」シリーズなど多数

◎あさの先生講演

岡山県の小さな町で物語を書き続け作家デビューして30年。1人で細々と物語を書いてきたので、「子どもたちの笑顔がどういうものか」と高いところからいうことはできず、私は物語しか書けない者なのでそこについて話していきたい。

自分が書いているものは時代小説が8割でデビューは児童文学。何を書いているでも「子ども」というキーワードがいつも生々しくある。年々、子どもたちが本当に心から笑える、笑顔が作れる世界が縮小している気がしてならない。悲惨、絶望を感じる世界でガザとかの状況をみた時とても心が痛むことが多く、自分が何ができるかと考えた時、物語に現実をどう取り入れ向き合っていくかということを考えざるを得ない。ガザでは5万人の方が亡くなっていてその半分が子どもである。何人亡くなっていると子どもたちを数字で表すことでこれで終わりになってはいけない。数にとどまらない子どもを一つの個人として一つの人間として表すのが物語で、人間の手ごたえを人に伝えることができたらとこの仕事をしている。閉塞感が増えている今、上面だけではだめである。卒業式でありきたりの希望を子

どもたちに語っても意味がない。今日よりも笑顔の少ない未来の中でそれでも絶望しないでどんな未来を語れるかが大人は試されている時代である。絶望があっても希望を語れる強さが絶対的に大人に必要なものだと思う。自分はそれを物語の中で何とか食らいついていきたいと思う。

会場の先生たちは毎日小さな笑顔、小さな命に向き合って直接影響が与えられる存在である。どんな時でも99%の絶望の中で1%の希望をもてる大人として共に生きていきたい。またそういう大人、そういう大人になろうとしている少年・少女を描いていきたい。

◎あさの先生と5名の登壇者との対談

○認定こども園あさひ幼稚園 岡本先生

今回の対談に際して「バッテリー」の本を一気に読んだ。読み終わった後、「おー！」という感じだった。中学生の子どもたち、まわりの大人たち、季節、世界の広さに感動した。いろいろなジャンルに挑戦している源はどこにあるのか？

➡人を書きたい。自分の中から自分が会いたい人間がいる。最初はおぼろげだが、だんだんとみえてくる。彼・彼女の物語がみえてくる。書き上げても書きたい人間が見えてこないところもある。「バッテリー」の主人公原田たくみが、どんな人間なのか書き続けたがあなたじゃダメだと言われた気がする悔しい思いがある。達成感、挫折感、敗北感も感じた。

○第2 ひかりこども園 小林先生

自分は楽しいこと、おもしろいこと大好き、舞台に立つのが好き。また、出し物を自分で考えて脚本を書いている。書けなくてダメな日も多いが降りてくるのを待つ。絵本「ちこちゃん」が大好きでひきこまれた。文章を書く中で気をつけていることは？

➡プロとアマのちがいは文章を書き続けるのかそうでないかである。文章を書くうえで文章にたくらみを入れない。そこに生きている人が道具にならないように、プロはこの場面をどう表現するのか？誰が演じるかに心を砕く。他は考えない。

○美作大学附属幼稚園 林先生

小学2年から大学4年までソフトボールをしてきた。バッテリーではピッチャーの心情や周りの様子等ソフトを経験されていたように内容が親密に書かれていたが、ソフトボールは経験がされていたか？空想の世界なのか？

➡映画は入った監督のもので、家族の物語として作品化したいと。私は主人公の少年一人を追いかけていたので、家族には違和感があり任せて大丈夫かという葛藤があった。私のとは違うけれどバッテリーができていた。私は野球の経験はなく、ルールも知らないこともあった。軟式野球のボールを買ってきて感覚を知った。マスカットスタジアムのマウンドに立たせてもらったことがあり、音・光が集まってくる経験をすることができた。野球をやったことがないからスポーツができる肉体に対して憧れがあり、それを知りたいと思い自分の感覚を掘り起こして、ピッチャーではなく「たくみ」個人を書いていった。真実を知っている

人は怖い。

○第二ひかりこども園 菊地先生

保護者が迎えに来られた時など、言葉を選ぶ難しさがあるが、物語を書く時言葉の選択があるのか？

➡児童文学と歴史小説は似ているところがあるが使えない言葉も多い。幼年ものを書くのが一番難しいが言葉の選択の作業をしていかないといけない。子どもたちに絶望を伝えるのではなく、今日より明日はもっといいよ！と私たちの生活に根ざした言葉一子どもたちに届く生きた言葉を子どもたちに伝えることが大切。ありふれた言葉を一つ一つに格闘していくことの大切さがある。

○光岡コーディネーター

あさの先生とお母さまとの関係は？

➡母親は教師。母親との関係は大人になってかっこいい人と思えるようになった。こういう親子関係がいいとか、決めつけることはよくない。個と個の関係は他人が決めたけりしてはいけない。

○倉敷マリア・インマクラダ幼稚園 畑元先生

2020年朝日新聞の掲載にて「大人の言葉をうのみせず考えてみて」と大人への問題提起があった。続きを書かれるならどのような記事になるか。

➡記事はコロナ禍の記事(学校が一斉休業した時)コロナの時に子どもから奪ったものを、同じことがもう一度あった時に、子どもから奪ったものを大人が責任を持って検証し社会や政治レベルで検証してきたか問い、次へ活かしていくことが大切である。

○認定こども園あさひ幼稚園 岡本先生

1日に書く時間が8~9時間とお聞きしたが、どれくらいの人が携わってどれくらいで本ができているのか？1冊書く時はどういうふうにして？

➡最初から枠を決めない。「バッテリー」のシリーズ化はしたくない。ミステリー作家は枠を決めてから書く。自分は現実の中で枠をはずしていく。ゲラ(本になる手前)印刷されたものを直していくが微妙な感覚がある。次に再考3回、紙の質・表紙などを決める。たくさんの方が携わってくださっている。原稿が出来上がってから4か月ぐらいで本になる。

○第2ひかり幼稚園 小林先生

自分はこの仕事がむいていると思っている。あさの先生も書くことがむいているのでは？

➡作家になりたいと思ったのは中学生の時。デビューしたのは37歳。やりたい仕事が多くなかったのずっと書いていた。一生書いていたい。

○内田伸子先生（基調講演者）より

あさの先生の書き方では名前が出てくると彼・彼女が動く舞台が整ってくる。そして動き始めたらそれを見ながら一緒に書いていくという風に言われとても面白いと思った。やっぱり人を書きたい、人の生き方それを書きたいからこそ私たちにとって感動を呼ぶ作品になっているのだと思い感銘を受けた。

○最後にあさの先生より

現場で共に暮らし時間を過ごしている人たちが一番。大変なことは多いが子ども達に対して1%の希望を語れる先生であってほしい。子ども達をとことん信じ込み、子どもたちから信じてもらえる大人が増えていったらよいのではと思う。みなさん、一人一人がすごいと思うし、すごいからゆえに責任は重いと思う。一人の大人として一人の書き手として一緒に頑張っていきたいと思う。

終わりに

あさのあつこ先生の記念講演では、講演と活発な対談が行われた。創作・執筆活動の中、創造力があさの先生の体内からいっぱいに溢れていると感じた。バッテリーの作品のことから始まり笑いも出て和やかな対談となったが話は深いものがあり、子ども達の笑顔を願って保育者も保護者も明日からの幼児教育に活かしていけるものと思う。